

論 述

注 意

1. 問題は全部で6ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

問一 本文中の空欄①～⑤に該当する語句を以下の(ア)～(エ)から選び、その記号を解答欄に記入しなさい。

解答用紙(その二)を使用

(ア) はなす (イ) 話す (ウ) かく (エ) 書く

問二 筆者は人間の創造的営為をその行動形態によって分類しているが、傍線部(a)「三つの分類」に関する筆者の説明を一二〇～

一五〇字で要約しなさい。解答用紙(その一)を使用

問三 本文の内容を踏まえ、傍線部(b)の主張について、その是非も含めてあなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

解答用紙(その二)を使用

言葉のはたらきが人間の意識の表出の中心にあることはいうまでもなく、言葉のはたらきへの考察を欠いては、人間の行動の本質へ接近することなどけつてできない。とはいえ、言葉にはA、B、Cの三つの形態があつて、言葉Aは「話し言葉」、言葉Bは「書き言葉」、言葉Cは身振り言葉・その他という安易な分類法から表出や表現の本質に接近できるわけではない。

実際にはこの世界の言葉には、「話された言葉」と「書かれた言葉」の二通りがあるにすぎない。「人間の意識の表出」という切り口で見れば、「はなす」表出は「はなされた」表出の全体、「かく」表出は「かかれた」表出の全体が重要であり、「はなす」表出のなかで「話し言葉」が中心的役割を演じることが多く、「かく」表出のなかで「書き言葉」が主たる役割を演じることが多いという以上ではない。

愛情に満ちた表情で黙って大きく頷く——この同意の表出と、「わかりました、それでよろしい」と言葉をともなった同意の表出とのあいだには形態上は確かに差がある。だが、前者には言葉はまったく存在しないのに、後者には存在するというような決定的な差が表出や表現上あるわけではない。言葉として発せられようが、そうでなからうが、共通に「はなす」という手段によってひと

つの同意の表出が行なわれたと考えるほうが現実的であり、正しい。人間にとつて、言葉が重大であることはいうまでもないけれども、とはいえ言葉は全能ではなく、人間の意識の表出、表現こそが重大事なのだ。

このように、人間が意識を表出する手段と行動の種別に焦点をあてて、文学、絵画、音楽というような芸術のジャンルに目をやれば、これまで見えてこなかった思いがけない繋がりや、あるいは逆に、近くにあると思っていたもののあいだの深い断絶などが生き生きと見えてくる。

現在の文学、書、絵画、建築、陶芸などと呼ぶ芸術の分類法は必ずしも正確なものではない。眼で視るから視覚芸術、耳で聴くから聴覚芸術という区分に至つては、芸術を消費する側の立場からの、語呂合わせのような分類にすぎない。芸術や表現はもろろん消費されるものでもあるのだが、基本的には生産、創造されることが本質であり、人間の創造、労働行為から区分するほうが正確である。

芸術の創造的営為は人間の行動形態から大きく分けて三つの分類が可能になる。^(a)日本語のなかのいわゆる和語はその指し示す意味内容に曖昧さをもつとはいえ、意味の歴史的原形と重層を保存している。これらの和語系の日本語のうち、「動詞」を用いて考察すると、人間の意識の表出の様態を理解しやすくなる。動詞は、主語を生み、述語を生み、構文を生む母胎であるからだ。表現ないし表出の様態を人間の行動形態にしたがつて、「はなす」表出、次に「かく」表出、三番目に「つむ・くむ」表出の三つに分けて考えてみる。

まず、「はなす」とは、人間が身体の各部のはたらきを総動員して、意識を中空に放出する表出行為、いわば、意識を「放す、離す」行為である。空気は振動し音に変形されるにせよ、自然界のありようには目に見えるような固定的な変形が加えられないで実現される表出行為である。

たとえば、言葉を主とする歌唱・演説・浪曲、身振り・手振りが参加する落語・漫才・講談、人間の身体ふるまいが重要な表出を担うコント・演劇、そして言葉なしでも成立する舞踊・舞踏、今はスポーツというジャンルに組み込まれている歩く・走る・

跳ぶ……。これらは根本的には「はなす」表出に属する。

他方、目に見える形で自然界に変形を加えて実現する表出行為がある。この場合、自然に減算的変形を加える「かく」表出と、自然物を積み上げたり、組んだりすることによって自然を加算的に変形する「つむ・くむ」表出とが考えられる。

「かく」、つまり「欠く、搔く、描く、書く、画く」表出とは人間が道具を手にして、自然などの対象に働きかけ、傷をつけるなど、これを減算的に変形するという方法によって意識を表出する行為であり、文学、絵画、彫刻、書、文様などがその例である。

石や木を「欠く」ことによつて彫刻が生まれ、「欠く」ときに発生する音の目的意識的再現が木や太鼓や金属を打ち鳴らす打楽器演奏を生み、「搔く」ことが文様以前、絵画以前、文学以前、書以前の表現を生み、やがて「書く」ところの文学と書が誕生し、「搔く」文様や「画く・描く」絵画との間に境界を発生させた。

そして、縄状の粘土を「つみ」上げることによつて出来上がるのが陶芸であり、塑像である。石やレンガや木を「つむ」または「くむ」ことが建築である。さらに石組み（「くむ」）の造園もある。植物や動物の繊維を「くむ」ことによつて織物、編物、「つむ」ことによつて漉紙かみが生まれている。

むろん、それぞれの芸術ジャンルは、それぞれ固有の発達を遂げ、相互にさまざまな結合や浸透を形成してきている。現在では、歌唱や簡単な器具を口につけた吹奏楽器演奏など①「表出も、」②「手段に由来する打楽器演奏も、ともに、音楽として同一範疇で扱われており、また彫刻と塑像は「立体」として同じ美術の範疇で扱われているが、実際には表現の起源と本質を異にする。おそらく、踊りと落語とが「はなす」芸術として同類のものであるとはにわかには信じがたいだろうが、芸術について考察する場合は、人間が意識を表出する行為の違いにしたがつて、「はなす」「かく」「つむ・くむ」という区分は、とても有効だと思われる。

原始社会において、「はなす」「かく」「つむ・くむ」という表出行為による営みやその生産物は「まつり」の場に一同に集められた。というよりあらゆる形態の表現が一同に集められ、演じられる出来事の全体が「まつり」であった。それは、あらゆる芸術や技術を総合する現在の万国博覧会という名の「まつり」であつても例外ではない。

さらに、子供たちの遊びが「はなす」「かく」「つむ・くむ」表現に関わっているという事実は興味深い。「はなす」表出の原型は、ものを投げたり、踊ったり、おどけたり、走り回ったり、歌を歌ったり、大人からは意味の分からない話をするのである。落書きや絵かき、でたらめ書き、棒切れやものさしを持ってやたらあちこち打ち鳴らすことなどは、「かく」表出の原型である。積み木や砂場遊びやあやとりは、「つむ」ないし「くむ」表出である。現在の子供たちの遊びがどのように変容しているのかは知らないが、ついでこのあいだまで私たちが見ることのできた子供の遊びは、意識の表出、表現の原型を保存し、子供たちが「まつり」の世界に棲みついていることを証していた。

かつて私は川田順造の『無文字社会の歴史』を興味深く読んだ記憶がある。文字をもたない西アフリカ・モシ族の太鼓の音が、落語の出囃子でばやしで高座に上がってくる咄家はなしかの名前や顔や話しぶりまで思い浮かべるように、共同体の王の歴史と王への讃歌を表出しているというくだりは驚きであった。古代人の太鼓の音は原始的な音楽と思っていた私には目からうろこが落ちたように感じられ、近代的には五感と言われる感覚の統合性や意識の表出とその手段の関係についてのさまざまな連想をかきたてられた。また、私たちが長く保存してきた無文字社会と文字社会という二分法に疑問を投げかけ、無文字社会と文字社会という区分が成立し両者のあいだで質が異なるのは事実だが、そのことは両者間に決定的な価値的な差が存在することを意味しないことに川田は触れ、無文字社会と文字社会との連続を説き、現代の私たちの日常生活の中にも無文字的な生活が大きな比重を占めているという指摘にも興味を覚えた記憶がある。文字社会を文明社会として優位と考えていたそれまでの私たちの通念に反して、無文字社会と文字社会とを等置した川田の研究はとても刺激的であった。

モシ族の語り部の出現を夜明けから長時間待ったにもかかわらず、太鼓打ちが太鼓を打ち鳴らしただけで帰ってしまった。あとで聞くと太鼓の音が歴史を物語っており、太鼓打ちが語り部であった——という川田の興味深い失敗談がある。川田は太鼓の音が王の歴史を物語っていることに驚いている。しかし、太鼓の音は「はなす」ことではなく、「かく」こと、すなわち歴史を「かいたもの」であり、太鼓打ちは「語り部」はなし部ではなく、いわば「かき部」であると考えることができたら、この失敗は避けられたこ

とだろう。

文字の発明によって、語りの時代から書く時代へ転じたのではなく、実際には、人類史とともに「かく」という手段による意識の表出史が現在に至るまで連続とつづいてきており、その歴史上のある時点から」③「表出形態の一変種として」④「表出が発生してきたと考えるほうが正確である。このように考えるとき、いわゆる無文字社会と文字社会とのあいだの価値の上下はまったく消え、ひとつづきのもののなかの、単なるしかし決定的に大きな違いとして認識されることになる。

ラスコーの壁画やニオーの壁画はかつて、原始的絵画であると考えられていた。だが、ルロワグーランなどの研究によって、それは現在私たちが考えるような意味での絵画ではなくて、何かの物語や歴史が前文字的に確実に「かかれ」ていることが明らかにされた。無文字社会の「まつり」に集められたトーテムポールや祭器に刻まれた彫刻や文様、絵、また打ち鳴らされる太鼓は、文字以前の物語や歴史文学・歴史文書、また「かかれた」音であったのだ。

文字をもたなかった時代であっても、現在の「かく」という表出形態である文学や書と同種のもを少々異なった手法で「かいて」いた。私たちは、文字社会、無文字社会という平板な歴史・空間区分ではなく、人類が誕生したときから始まっている壮大な「かく」歴史のなかに、ある時期から「書く」歴史の時代があると考えの方がよいのではないだろうか。

しかし、よく考えてみれば、「かく」つまり刻^(a)ることが創ることであるというのは罪深いことである。自然を減算^{マイナズ}的に変形するということ**は即、自然に傷をつけることであり、人間の歴史は原罪的に、自然をいくぶん破壊することによってしか創造が存在しえないことを証しているのだから。**

「はなす」表出の原型は、人間が互いに喜びや悲しみを分かちあったり、危険の来襲を伝えたり、共に収穫・収穫する共同性の表出にある。それは、道具を手になかった動物も共通にもつ自然の共同性の上に成り立っている。

現在の考古学的見解によれば、文字が誕生するのは数千年からどんなに遡っても一万年くらいにしかならない。だが、「書かれた言葉」はなかったにせよ、文字誕生以前にも、人類誕生以来、「かく」表出は彫刻以前、絵画以前、文様以前、文学以前、書以前

の形態をもって華咲いていた。

「かく」表出は、「はなす」表出とは異なり、人間が道具を手にもち自然を変形加工するという意味で、道具生産の技術が関与する生産の一形態である。そのため、人間社会での「はなす」表出の全体性、普遍性にたいして、「かく」表出は社会的統合、支配の表出という部分的性格を色濃くもつ。刀剣や銃砲を用いる戦争が現在もなお、国家によって保管され、管理されるように、「かく」道具や「かかれた痕」は国家や権力によって登録され、保管されるのが常である。ミサイルや軍艦、戦闘機を市民が勝手に所有しようものなら、国家権力が成立しえないように、「かく」者は国家の上層に位置し、象徴図象のような「かかれた痕」は、氏族や国家支配者の所有物であった。だれでも自由に文様を施し、勝手に彫刻を彫り、太鼓を鳴らし、絵を画くなどということはなく、「かく」ことの出来る者は、共同体の権力者であり、権力によって支配・管理されていた。縄文社会の管理した文様が土器に描かれた縄文文様であり、弥生社会が管理した文様が弥生式土器に描かれた弥生文様であった。つけ加えれば、「かく」道具の原型である農耕具も永く共同体の共有であったように、「かく」こと「かかれたもの」はいずれも氏族や国家に属するものであった。

原始社会も高度化するにしたがって、とりわけ共同社会の規模が拡大し、共同体間の複雑な交渉など政治的必要度が高まるにともない、人間生活の全分野を覆う「はなす」表現のうちの「話す」表現閾値内では、時間的・空間的に、政治的支配を貫徹できなくなった。ついに、「はなす」表出の神権的、政治的な頂上部分は「かく」表出へと転化し、政治的な表出の閾値を飛躍的に向上しようとする。この必要が、もともと技術的、生産的であり、それゆえ政治的管理の続けられた「かく」表出の飛躍的成長を促し、「はなす」表出の一部が「かく」表出に流入することによって、「はなす」閾値も時間的・空間的に飛躍的に向上した。この歴史的事件が、俗にいう文字の誕生、私の言葉でいえば「書く」こと」の誕生である。むろん、当然に政治・社会機構の高度化は、彫刻・文様状の「かく」こと」の表出の政治的色彩を強めることによって、前段階の「文字」をすでに準備していたことは言うまでもない。

このように「書く」こと」の成立には、政治的・国家的支配の超高度化によってもたらされた「はなす」表出と「かく」表出相互の飛躍があった。「書く」ことが成立することによって、「⑤」ことが本当の意味で成立し、さらに「書く」ことが成立することによって、絵画を「描く」ことや文様を「掻く」ことや彫刻を「欠く」ことが、別個のものとして分化、独立することになったのである。

（石川九楊『筆蝕の構造』による。原文の一部を改変、省略した。）

